

審査員のことば

東京大学大学院
総合文化研究科教授

酒井 邦嘉



今年も幼児と小学生低学年の作文を審査しました。私の読んだ作品では、幼児は「きもち」のこと、小学生は身近なことの「ふしぎ」にふれているものが多かったと感じました。そのとらえ方一つひとつに個性があり、たしかに子どもの成長が感じられて、私も楽しくなりました。

「すなおな心」を持つこと。これが生きていくうえで、いちばん大切です。どんな心の持ち主かは、顔を見ていてもわかりません。でも、文章を通して感じとることができます。今回のどの作品からも、すなおな心がくもりのない文章を通して伝わってきました。それが何よりすばらしいことだと思います。

人生では、ほんとうにいろいろなことが起こりますね。さまざまな心配ごとや、やるせない思いが積みかさなったり、まわりの人のねじ曲がった心がわかってしまったりするのは、きつと避けられないことでしょう。それでも自分の心がくもったり曲がったりしないようにするには、どうしたらいいでしょうか。

私は「芸術」が必要だと思います。子どもたちには、情操を伸ばすための十分な時間が大切です。楽しい音楽を聴き、奥深い将棋の指し手を考え、不思議なマジックに驚き、美しい絵画を観ること。このように芸術に接するうちに、生きることの本当のすばらしさが自然とわかってきますから、すなおな心がきつと作文にもあらわれてくることでしょう。